みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

グローバル支援の人類学：変貌するNGO・市民活動の現場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008694

グローバル支援の人類学
──変貌するNGO・市民活動の現場から

信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編
昭和堂／2017年／本体　3,700円＋税

東西冷戦終結後の1990年代以降、先進国が発展途上国の支援に関与する意味合いが変わり始め、場合によっては、自国の利益を優先し、途上国の支援活動から撤退し始める事態となっていった。こうした状況のなか、それまでは小さな組織体であったNGOやアソシエーションなどの市民社会の諸アクターが、支援のエージェントとして台頭するようになった。

これらNGOや様々な民間アソシエーションは、持続可能性を目指して、人びとのエンパワーメントに重きを置いた草の根レベルの支援を行なっていった。つまり、グローバル化によって人びとに普遍的に受け入れられるようになった価値（貧困削減、環境保全、疾病対策、教育、先住民の権利、災害支援など）に基づいて、人びとが行政に頼らずに自立して生きていけるような支援を行なっていったのである。

21世紀に入ると、インターネットやSNSなどの電子メディアが急速に普及するようになり、遠くの地に暮らす他者に関心を持つことや、見知らぬ者同士がつながることが、これまで以上に容易になっていく。困っている人を助けたいという気持ちもグローバルな広がりを見せており、たとえば、災害支援が必要となると、瞬く間に世界中に支援の輪が広がり、支援の手が差し伸べられるようになってきている。

本書では、グローバル化によって広がりつつある普遍的価値に基づく支援を意味する「グローバル支援」という言葉を中核に、助け合いという、人類がその誕生以来持ち続けてきた協力の精神に焦点を当て、変貌する支援の現場をミクロかつ被支援者に寄り添った視点で報告する。なお、本書は、共同研究「NGO活動の現場に関する人類学的研究──グローバル支援の時代における新たな関係性」（代表者：信田敏宏）（2011年度～2014年度）の研究成果である。

本書の第Ⅰ部では、開発援助や市民社会に関する議論、互酬性などの人類学の理論などを援用しながら、本書での視座を提示する。具体的には、政府開発援助の誕生の歴史とその後の状況の変化をたどりながら、1990年代以降、NGO活動を中心とした「グローバル支援」が出現してきた背景を世界史的な視点から明らかにし、市民社会論やグローバル市民社会論をレヴューしつつ、NGOによる支援活動をグローバルな互酬と捉える新たな考え方を提示し、さらには、支援の現場に関わる人類学者の貢献の可能性についても論じている。

第Ⅱ部では、支援の現場における多様なアクターに焦点を当てる。それらのアクターとは、日本の国際協力NGOの担い手たち、国際ボランティアに参加する学生たち、パキスタンのスラムの学校やインドネシアの農村を支援する日本のNGOのメンバー、タイの先住民支援NGOで働くNGOワーカー、NGOを立ち上げ支援活動を行なう人類学者自身である。このようなアクターたちの視点を通して、読者は、支援者たちの様々な葛藤や思いをはじめ、支援の現場で起きている問題の諸相を具体的に知ることができるであろう。

第Ⅲ部では、グローバル化によりもたらされた新たな理念や価値が交錯する支援の現場において、人びとの関係性がいかに変容しているのかということに焦点を当てる。南太平洋のソロモン諸島の事例では、支援の持続可能性はいかにして担保されるのかということが問われ、障がい者の就労を支援するイタリアの社会的協同組合の事例では、支援の現場で新たな関係性が構築されていることが明らかにされる。韓国の放射性廃棄物処理場建設計画をめぐる住民運動の事例では、研究者自身が問題にどのように向き合うべきかが問われている。タイ南部のインド洋津波被災地における宗教系NGOの支援活動の事例では、人びとがどのようにして2つの異なる宗教系NGOと関係を構築しているのかを明らかにしており、フランスの農民支援アソシエーションの事例では、アソシエーションに関わらない人びとを含めた理論的な考察がなされている。

以上のように、本書では、グローバル支援に至る支援の歴史と現在進行形の支援活動の混沌とした現状を報告している。世界史的なスケールで描かれる支援に関する理念の変遷と、世界の隅々まで広がりつつあるNGOによる支援活動やそうした活動に関わるアクターが織りなすそれぞれの支援の形を人類学者の目線で詳らかにしようとする本書の試みは、支援とは何か、支援の未来の形はどうあるべきかを考えるための、さらには新たな世界観・社会観を構想するための一助となりうると自負している。そのようなものとして本書が読まれるのであれば、編者として望外の喜びである。

文　信田　敏宏

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は社会人類学、東南アジア研究。著書に『周縁を生きる人びと──オラン・アスリの開発とイスラーム化』（京都大学学術出版会 2004年）、『ドリアン王国探訪記──マレーシア先住民の生きる世界』（臨川書店 2013年）、『「ホーホー」の詩ができるまで──ダウン症児、こころ育ての10年』（出窓社 2015年）など。